



ふれあい活力ゆとり

### すみだ

**江戸時代のすみだ**  
天正18年（1590年）、徳川家康が江戸に入ってから、戦国争乱の時代が終わると、隅田川以西の江戸の町は急速に発展していきました。  
そのころ、すでに耕地として開拓されていた現在の墨田区の北部区域はともかく、南部区域の大半は未整備の湿地帯で、この地域が市街化されたのは、明暦3年（1657年）の大火（振袖火事）がきっかけです。

これによって江戸市街が焼きつくされ、10万人余りの命が奪われ、幕府は本所牛島新田（現在の両国二丁目付近）に焼死者を葬り、回向院を建てました。  
幕府は防火対策中心の復興計画に着手し、市中に防火堤や広小路などを設け、その区域の武家屋敷、町屋や寺社などの移転先として南部区域すなわち本所が開発されることとなりました。  
こうして、万治2年（1659年）から、本所奉行を中心に、



葛飾北斎「富嶽三十六景 凱風快晴」（墨田区所蔵）

墨田区の誕生から、いまをたどる③

## すみだ歩んだ歴史

### 北斎館（仮称）建設を計画しています

区では、墨田区を生誕地とする世界的な浮世絵師・葛飾北斎を区民の誇りとして永く顕彰するとともに、新たな文化創造の拠点となる「北斎館（仮称）」の建設を計画しています。そこで、開館に向けて、施設整備に係る具体的な方針をまとめた「墨田区北斎館（仮称）施設整備方針」をご紹介します。

北斎の作品は、国内外の芸術家に大きな影響を与え、国内のみならず、海外においても評価が高いものです。

また、北斎は平成11年（1999）に米「ライフ」誌が行ったアンケート「この1000年間で最も偉大な業績を残した100人」の中に、日本人として、

ただ一人選ばれました。

「北斎館（仮称）」は美術館として、①北斎顕彰を通じて、地域に愛着を深める場②国内外に向けての情報の発信③区民の生涯学習の場④国内外の交流の場として、また⑤地域活性化の拠点（観光、産業へ寄与すること）を目的に、さまざまな事業を実施する予定です。

区では、建設地を生誕地である亀沢地区に予定しており、今後交通アクセスの整備も含めて、十分な検討を行います。

詳しくは区のホームページをご覧ください。文化振興課北斎館建設準備担当（電話5608-6115）にお尋ねください。

堅川、大横川、横十間川、南北割下水の開さくが進められるとともに、低湿地の埋め立てを行い、道路を築造し、整然とした町割の市街地が形成されていったのです。そして、この年の12月には隅田川に大橋（現在の両国橋）が架設されて、江戸市中との交通も盛んになっていきました。  
また、元禄15年12月（1703年1月）、本所松坂町吉良邸に四十七士が討入った事件は江戸町民の話題をさらっています。  
北部区域は農村地帯として江戸市内に農産物を供給し、墨堤一帯は江戸町民にとって絶好の遊覧の地として、多くの文人墨客の訪れるところとなりました。  
しかし、宝永元年（1704年）、利根川の堤防が決壊し、本所のあたりまで被害を被る大洪水をはじめ、住民は幾たびも

した。  
さて、現在でも時代を越えて人々に親しまれている墨堤の桜、隅田川の花火、両国の相撲も江戸時代中ごろに誕生しています。特に両国橋のたもとから回向院にかけては淡雪どうふや与兵衛ずしを始めとする飲食店や芝居小屋が多くできて江戸の盛り場としてにぎわいました。文化・文政期には格好の行楽地として、歌舞伎や落語の舞台になり、1804年（文化元年）には佐原鞠場によって向島百花園も開園しています。  
江戸時代後期は、浮世絵師の葛飾北斎、俳諧師の小林一茶、幕臣の勝海舟などの著名人が暮らした地域でした。一茶は本所相生町に住み、  
雉子鳴くやかの梅若の泪雨などの句を残しています。



すみだ地域学セミナー（後期）

# 「それからの海舟〜波瀾万丈の明治時代を生きる」

【講師】作家 半藤 一利

## 勝つつあんゆかりの地

勝海舟と言うと、維新前の若い時の勉強家時代の話とか、アメリカへ初めて行った話とか、西郷隆盛と江戸無血開城の談判をして、江戸を火の海にしないで無血の間に戦争を止めたことで非常に有名な方ということになっています。今日の話は、西郷さんと無血開城をした後の勝つつあんがどういう生き方をしたかをお話したいと思います。

勝つつあんは文政6年（1823年）に、本所の亀沢町、現在の両国四丁目あたりの生まれです。向島の辺には勝つつあんゆかりのところがいくつかございます。清澄通りを北上、両国の方から向かっていくと、春日通りを右に行つたところに、能勢の妙見堂があります。私も一回しか行つたことがないんですが、勝つつあんの胸像もあります。ここは実は勝つつあんのゆかりのお寺ではなくて、勝つつあんが9歳の時に犬に大事な男の急所をかまれましたそれで瀕死の重傷を負います。

有名な方で、能勢妙見さんにお参りに行きました、素っ裸で

「能勢観音、もし俺のせがれを死なすようなことがあつたら、お前にご利益はないと、江戸中言いふらしてやるからな。しつかり俺が拜んでいるんだから、お前、うちのせがれを治せよ」と、徹夜でお参りをしたことで有名なお寺ですね。

それから墨田区役所前に新しく銅像が建立されましたね。さに向島の土手の側の牛島神社が言問橋から南側にあります。昔は北側にあつたんですが、今は南にあります。昔は牛の御前とか、王子権現さんと言つたんですが、勝つつあんの剣術の稽古の場所なんです。ここにのべつ朝早くから来まして、剣術の稽古をしたわけです。勝つつあんなは若い時は、学問よりもむしろ剣術の方で名を成した人なんです。

さらにその先の、私の子どもの方は「ぐふくじ」というように覚えていたんですが、最近皆さん弘福寺（こうふくじ）と言っています。中国式の山門があるお寺で、座禅を組んでいます。これも何年も来て組んでいるよ

うですから、勝つつあんゆかりの本堂です。空襲でやられてませんから、当時のまんまです。

## 江戸無血開城の談判と町民避難

勝つつあんなは、最後の談判では、「徳川家は降伏をする。しかしながら、我々家臣としては元將軍の徳川慶喜公を、もし死刑とか切腹させるとかするならば断固戦う。それ以外のことは全部承知するが、この件だけは譲れない」と。はじめ西軍の出した条件は、もう少し厳しいものだったんです。すぐには切腹させないまでも、どこかに流して、西軍側のどこかに預けて、そこに塾居させる、謹慎させるというふうな条件だったんです。しかし、勝つつあんなは慶喜さんが水戸の出身なものですから、水戸で謹慎させてくれということと言つたんです。

ところが西郷さんは、いい返事をしなかった。そのほかの武器がどうのこうの、城を明け渡すのをどうするか、細かいことは決めたんなんですが、これを全部勝つつあんなはOKしてらんです。「我々徳川家の武士としては主君を守るのが武士の真髄である。したがって我々はどんな条件も承知するが、慶喜公の身柄だけは是非守りたい」

この談判で西郷さんは「承つた。しかし私の一存ではできないので、私が京都まで行って全部の人間と相談をして、そして最後の返事をする」ということになりました。

## 一方で、勝つつあんなはもし戦争ということになるならば、薩長軍を全部江戸に入れて、江戸町民は全部海岸線に集めて、千葉県とかの船を持って人間全部に檣を飛ばして、江戸町民を全員乗せて逃がす。それで江戸の中に入った薩長軍を全部火

の海にする。焼き殺しちゃうと。その時に頼みに行ったのが、浅草の新聞屋五郎という親分。「いざとなつたら江戸の町を火の海にできるか」と勝つつあんなが言つたら、辰五郎は、「私は火消しですよ。火消しは消すばかりじゃない。火を使うのは上手なんです。肝心要のところは火種をおいて江戸三百六十五町を一気に燃してあげますよ」、「それじゃ頼むよ」と。江戸の町民は救い出し、薩長軍を全部中に入れて蒸し焼きにしてしまうという作戦まで立ててるんです。

## 勝つつあんなの人となり

この男は常に表には出ないんです。家鴨の水掻きですよ。家鴨は水面を静かに動いている。なんでもないように動いているけれど、水面下ではものすごく足を使っている。それが人間

大事なのであって、上の方ではちゃばちゃやっているのは見栄えがいいけれど、そんなもんじゃない。人間の行動というのは常に家鴨の水掻きだよ」と勝は言うんです。

ということで、江戸開城を見事に成し遂げた。

「このぐらいの準備をしておかないと、本當の談判はできない。本當にやる気なんだと、ちゃんと向こうにわからさなければ、向こうは単に降伏に来たんだというだけでは全然馬鹿にして駄目だ。俺はいざとなればやるぞという気迫だ。気迫が西郷を動かしたんだよ」と後で、また勝つつあんな自慢するんですね。それは若い頃に剣術をやつて、完全に自分を鍛え上げた。ですから背は小さかつたんですけど、肝つ玉は人の三倍ぐらいあつたんじゃないかという風に思うわけがあります。

（半藤先生のご講演の一部を再現しました）

### 半藤一利／作家・昭和史研究家

昭和5年、向島区吾嬬町に生まれる。18年、府立第七中学校（現都立墨田川高等学校）に入学。28年、東京大学国文科卒業、文藝春秋に入社。「週刊文春」「文藝春秋」の編集長を歴任。平成4年「漱石先生を愛する。10年、「ノモンハン」の夏」（文藝春秋）で山本七平賞を受賞。16年、「昭和史1926-1945」（金丸社）を出版、毎日出版文化賞特別賞を受賞、ロングセラーとなる。